

第三節 古代・中世の遺跡と遺物

熊野町における古墳時代以降の遺跡、遺物で時代のたどれるものは、きわめて少ない。現在までのところ中世の城跡、古墓、土居屋敷跡^{どいやしき}のほか、土師質土器^{はじしつどき}や近世の陶磁器片の出土地が数か所知られているのにすぎない。いずれも未調査のため全体の規模、構造、内容などのわかるものはないが、遺跡としては、城跡八か所、古墓五か所、土居屋敷跡一か所が確認されている。

城跡

城跡には、的場城跡^{まよば}（平谷地区）、嵩山城跡^{かさやま}、堀之城跡^{ほりのじりや}（城之堀）、狐ヶ城跡^{きつねがじやう}、四貫分城跡^{しかんぶん}、土^と（登）岐城^ぎ跡^{あと}（萩原）、榊森城跡^{さかきもり}・魁城跡^{かひ}（新宮）がある。形態、構造からすると土居型式と山城型式の城跡の二つに区分される。

土居型式の山城は、谷奥の独立丘陵や丘陵先端部を利用して築かれており、城山とか堀城と呼ばれていることが多い。規模は小さいが、自然の地形を生かしており、城の周囲には堀の役目を果す谷や小川があり、付近に城主の屋敷跡や菩提寺跡^{ぼだいじ}などが残ることが多い。町内では、堀之城跡をはじめ四貫分城跡、狐ヶ城跡、榊森城跡、的場城跡などが、この型式に含まれる。

堀之城跡 北西から南東にのびる丘陵先端部に位置し、標高二六〇～二七〇メートル、低地からの高さ約四〇メートルである。西側背後の丘陵尾根は、人工の堀割^{ほりわり}によって断ち切られている。近年の道路工事のため一部は削平されており、全体の構造や遺構などは明らかにできない。西端部の最高所にある郭^{くわ}（本丸）を中心に四ない

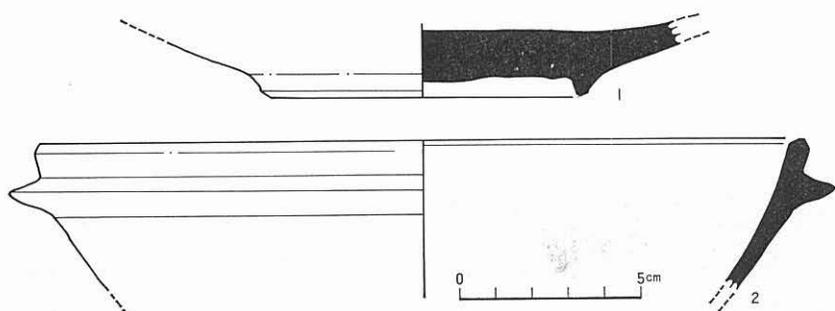


図3-3-1 堀之城跡出土の青磁・土鍋

し五つの郭から構成されている。本丸の東側下手には空堀があり、以前には本丸背後に石積み井戸が残っていたといわれている。城の両側には、城を挟むように小さな谷が入りこんでおり、天然の堀としての役割を果たしていたと推定される。築城年代をしる手がかりは少ないが、『芸藩通志』によれば、嵩山城の出丸かといわれ、菅田豊後守の居城と伝えられている。菅田氏は、安芸の東、西条（西条盆地一円）を支配した大内氏の家臣とみられ、大内氏の東、西条支配と関連して築城されたものであろう。また、採集遺物には、中国産竜泉窯系青磁片、土師質土鍋（図3-3-1）、小皿、備前焼甕片などがある。文献、遺物からみて室町時代中ごろには築城されたものとおもわれる。

四貫分城跡 北から南へのびる丘陵の先端部に位置し、標高は二五〇～二六〇メートル、平野からの高さ約三〇メートルである。城跡は、道上川北側の谷の最も奥まったところにあり、西側には、沖積低地がひろがり、東側は狭い谷となっている。城の西側は急峻な崖となっており、西からの攻めに対して堅固な防塞となっている（図3-3-2）。また、北側背後も堀切りによって分断されている。丘陵尾根を中心に五つ以上の郭や空堀があり、城の南側には、「ネゴヤ（根小屋）水路」、「ネゴヤ土手」、「土居屋敷跡」（屋号四貫分＝士官分）と呼ばれる場所が残っている。『芸藩通志』に

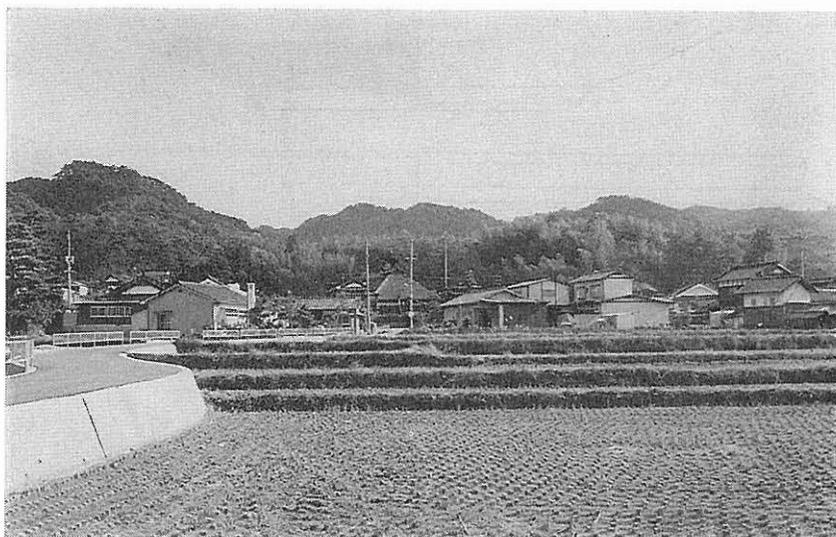


図3-3-2 四貫分城跡（中央低丘陵）と土岐城跡（左手丘陵上）

よると、本城跡の北側丘陵上手にある土岐城の外城と伝えられている。

これら土居型式の山城は、いずれも低地からの高さ二〇〜四〇メートル前後のところに位置し、五ないし六つ前後の郭で構成されたものが多い。通常は、領民の農業生活と密接な関係をもった居館的な性格の城と考えられる。文献や遺物から築城時期を明らかにすることはできないが、室町時代に入ってから、熊野盆地に基盤をもつ国人衆が築いたものと推定される。

山城型式の城跡は、いわゆる山頂部を利用して築かれた典型的な山城である。高い独立した一つの山を利用したのもや連山の一つの峰あるいはいくつかの峰を利用して構築したものである。一般に要害の地にある自然の高い山を利用してつくられており、山麓から山頂部にかけて郭や居館、石垣、堀、井戸、菩提寺などの多くの構築物が設けられている。これらの山城でも、通常の場合には、山麓に設けた居館で生活しており、戦時には山上に設けた郭を拠点にしていたものであろう。町内では、嵩

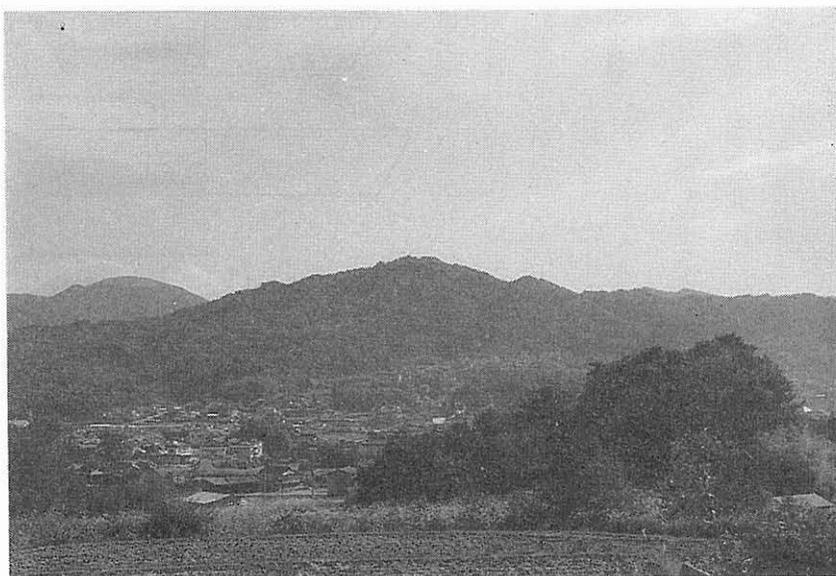


図3-3-3 土岐城跡遠景

山城跡、土岐城跡、魁城跡がある。

嵩山城跡 堀之城跡の西北側背後にそびえる城山

(標高五九二・八メートル)の頂部を中心に南北に連なる尾根を利用して構築された城である。全体の規模、構造などは、未踏査のため明らかにできないが、位置的には、野間氏の拠点であった矢野城(広島市矢野町)大内氏の槌山城(東広島市八本松町)、阿曾沼氏の日浦山城(海田町)などが一望できる地にある。『芸藩通志』によれば、「山麓に城濠、堀之城」という 嵩山の出丸か」とされるが、むしろ堀之城の見張所的性格をもった遺跡と推測される。

土岐城跡 熊野盆地のほぼ中央の標高四一八・六メートルの独立丘陵に位置し、城からは盆地のほぼ全域をみわたすことができる(図3-3-3)。山頂部を中心に四つ以上の郭が確認される。城主は明らかでないが、『芸藩通志』によれば、嵩山城の属城かとされている。城の南西側山麓部には四貫分城、狐ヶ城が位置している。山頂部から土師質土器小皿、

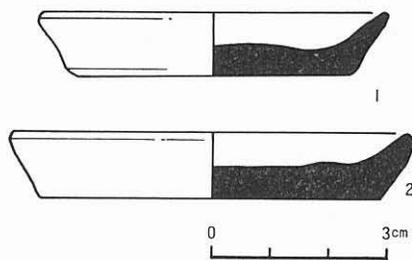


図3-3-4 土岐城跡出土の土師質土器

備前焼甕破片が採集されている。図3-3-4は土師質土器小皿で、口径六・〇センチと六・九センチ、高さ一・一センチの大きさがある。器内外面はヨコナデ調整。底部は糸切り底である。赤茶色を呈している。室町時代のものである。

魁城跡 南から北へのびる竜王山(標高四四七・三メートル)の丘陵尾根上に築かれた城で、四段以上の郭がみとめられる。全体の規模、構造は明らかでない。位置的には、熊野盆地の東側の出入口にあり、瀬野川町一貫田と八本松町吉川へ通ずる交通の分岐点が一望できる戦略的拠点に位置している。城主、築城時期など明らかでないが、北側山麓部で発見された宮林古墓や海上側古墓の

出土遺物から推測して一五世紀ごろの築城と考えられる。

これらの山城は、城主、築城時期など明確なものはないが、一五世紀以降の大内氏の安芸東西条支配体制の確立とともに築かれたものと推測される。

古墓

古墓には、宮林古墓、海上側古墓(新宮)、前地古墓(萩原)、榎崎古墓(城之堀)、隠田古墓(初神)などがある。

宮林古墓 魁城跡のある竜王山の北側山麓部に位置する。丘陵斜面をL字状に削平してつくった上・下二段の平坦部に石積み基壇が残っている(図3-3-5)。上手の基壇は、東西約八メートル、南北約二メートル、高さ約四〇センチの規模をもつ。また、下手の基壇は、東西約六メートル、南北約四メートル、高さ約三〇センチの大きさがある。基壇の内側中央部がさらに一段高くなっており、二段に築かれた基壇である。基壇上の構造物は



図3-3-5 宮林古墓



図3-3-6、7 宮林古墓出土の備前焼小壺と施釉短頸壺

明らかでないが、周辺に五輪塔、宝篋印塔ほうくわいんたうの残欠が多くみられ、少なくとも一〇基ちかくの五輪塔が存在していたらしい。基壇上より備前焼小壺と施釉短頸壺しゆうけんかが採集されている。図3-3-6は、備前焼の雀口壺すずめぐちで、口縁の一方に注口がついている。口径四・八センチ、高さ七・五センチ、底径四・八センチの大きさがある。外面胴部には、肩部から垂下する二条のへらによる窯印かまじしが刻されている。図3-3-7は施釉短頸壺で、口径八・九センチ、高さ一〇・二センチ、底径四・六センチで、〇・七センチの厚い高台がついている。口縁部は短かく、器内外に淡青緑色の釉が施されている。製作地については、明らかでないが、備前焼小壺からみて室町時代のものと推定される。

海上側古墓 宮林古墓の北東約三〇〇メートルの地点に位置する。古墓の構造等は不明であるが、丘陵斜面の削平中に備前焼小壺一点が出土している。付近には多くの五輪塔残欠が散乱しており、この小壺も、本来は、五



図3-3-8 海上側古墓出土の備前焼小壺

輪塔の下に埋納されていたものであろう。備前焼小壺(図3-3-8)は、口径四・八センチ、高さ七・七センチ、底径四・八センチの大きさの雀口壺で、宮林古墓出土のものと同ほ同じ大きさがある。器内外面には、ロクロ調整痕が残り、粘土紐の痕跡も顕著である。灰茶褐色を呈し、底部は糸切りである。形態からみて室町時代のものであろう。

熊野町で確認された古墓は、宮林、海上側古墓でみられるように、山城跡の麓に位置するものが多い。このことからみて、古墓の被葬者は、山城と密接に関連した者の墳墓であるといっ

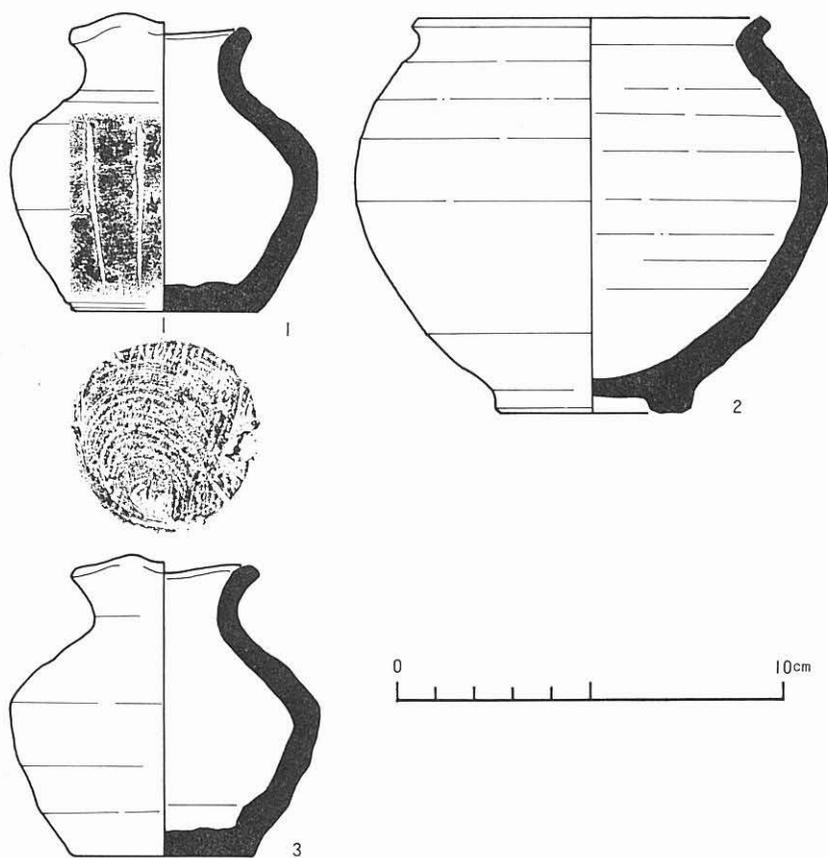


図3-3-9 中世古墓出土遺物実測図（1・2宮林、3海上側）

てよい。そして構造的には、石積み基壇きだんをもち、その上部に五輪塔ごりんとうや宝篋印塔ほうきやくいんとうが置かれていたと考えられること。また、遺物に備前焼小壺や施釉陶器がみられることからみて、これらの山城に拠った武士団、具体的には、安芸東西条の支配者であった大内氏の家臣団の一員の墓であったと推定される。